

第122回 貴重書展

明治の話芸

—三遊亭円朝と速記本—



平成21年 6月9日 (火) ~ 30日 (火)

鶴見大学図書館

後援 武蔵野書院

はじめに

本年は横浜開港 150 周年とのことで記念事業が開催されている。横浜の開港からまもなく、日本は明治維新を迎え、人々は急激な世の中の変化にさらされることとなった。

本年度の鶴見大学日本文学会春季大会は、明治期の文芸・話芸にかかわる講演がなされる。舌耕文芸をはじめとして近世・明治期の文学をご専門とされる延広真治氏（にんじょうぼなし 帝京大学教授・東京大学名誉教授）は、明治期に人情噺で人々を魅了した落語家三遊亭円朝（1839-1900）と、講釈師で鶴見にゆかりのある二代目松林伯円（1834-1905）についてお話をさる。

この講演会にちなんで展示を企画するにあたり、本学図書館に多数所蔵されている、三遊亭円朝の速記本を中心に構成することとした。

三遊亭円朝の話芸は、明治期に起こった速記術により、文字となり、本の形になって人々の間に流布した。一回限りで終わる芸能が書物の形になることによって周囲に与えた影響は大きかった。たとえば二葉亭四迷などの小説の世界、また、歌舞伎などである。速記本の書物の形自体も、和装・洋装など多彩で、過渡期の本のありかたを伝えてくれる。この展示では、ささやかながら速記本の形の多様性と、速記本の周囲へのひろがりという視点を中心に、明治の話芸、とりわけ三遊亭円朝の世界に触れていただくことを目指している。

静まりかえった真夜中、カランコロンと下駄の音を響かせながらやってくる美女お露の幽霊、困難に遭いながらも努力を重ねて成功する塩原多助、西洋の作品を日本のことがらにあてはめた翻案物など、円朝の作品世界とその登場人物は世の中をさまざまに写し出している。円朝の作品を読んだことのない学生のみなさんは、ぜひとも目を通して見て欲しい。その世界に必ず引き込まれるに違いない。

貴重な円朝の速記本の収集に関わられた図書館関係者の方々、先生方、今回の展示についてさまざまにお手数をおかけした図書館関係者の方々、また、展示に関する相談にのって下さり、本の写真をお撮りくださった日本文学科の先生方に、心より御礼申し上げます。

日本文学科准教授 佐藤かつら

※「人情噺」とは*（永井啓夫氏『新版 三遊亭円朝』より）
落語の中で、笑いのみを目的とするのではなく、「登場人物の描写を中心として世相風俗をうつすことを目的とするようになった結果、あるストーリーを持ち、大衆に迎合しつつも、文学的な要素」を持った作品になったもので、「鑑賞の主眼はあくまで写実的な人材描写」にあるもの。

※解題は佐藤が担当しました。お気づきの点をご教示いただけましたら幸いです。割書は〈/〉で示しました。また、各書奥付に見える住所・所在地は省略しました。

明治の話芸—三遊亭円朝と速記本—

目 録

I 三遊亭円朝について

- 1 ろうげつさんし 朗月散史『三遊亭円朝子の伝』 明治24年(1891)9月刊 発行：鈴木金輔
 - 2 三遊亭円朝書簡(年不明8月28日、ふくちおうち福地桜痴宛) 封筒付
- 【参考】かぶらききよかた 鏑木清方「三遊亭円朝像」 昭和5年(1930) 東京国立近代美術館所蔵
(『明治の古典 カラーグラフィック 1 怪談牡丹燈籠・天衣紛上野初花』学習研究社、1982より)

II 「怪談牡丹燈籠」

- 3 かいだんぼたんどうろう 『怪談牡丹燈籠』初版 全十三編のうちの五・六編
明治17年(1884)8月・9月刊 発行：東京稗史出版社
 - 4 『怪談牡丹燈籠』再版(明治17年9月)と初版の合綴 全十三編
発行：東京稗史出版社
 - 5 『怪談牡丹燈籠』別製本 全十三編
明治18年(1885)2月別製本御届 発行：東京稗史出版社
 - 6 『怪談牡丹燈籠』再版 明治18年(1885)5月刊 発行：文事堂
 - 7 『怪談牡丹燈籠』5版 明治19年(1886)7月刊 発行：文事堂
 - 8 『怪談牡丹燈籠』再版 明治40年(1907)8月刊 発行：文事堂
- 【参考】二葉亭四迷「余が言文一致の由来」
初出：雑誌『文章世界』明治39年(1906)5月(『二葉亭四迷全集』第四卷、筑摩書房、1985より)
- 【参考】二葉亭四迷『〈新／編〉浮雲』第一編 明治20年(1887)6月刊 発行：金港堂

III 円朝速記本の世界

- 9 『〈円朝／叢談〉しおぼらたすけいちだいき塩原多助一代記』
刊年不明(明治19年7月版權譲請) 発行：武部滝三郎
- 10 『〈円朝／叢談〉塩原多助一代記』別製本
刊年不明(明治20年1月別製本御届) 発行：武部滝三郎
- 11 『〈円朝／叢談〉塩原多助一代記』別製合本
明治22年(1889)5月刊 発行：覚張栄三郎
- 12 『しんけいかさねがふち真景累ヶ淵』 明治21年(1888)5月刊 発行：井上勝五郎(薫志堂)

- 13 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』
明治18年(1885)7月刊 発行：速記法研究会
- 14 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』
刊年不明(明治18年4月版權免許) 発行：武部滝三郎
- 15 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』
明治24年(1891)4月訂正出版 訂正兼発行：覚張栄三郎(上田屋本店)
- 16 『^{こがね}黄金の罪』(『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』改題)
明治24年(1891)4月訂正出版 発行：上田屋本店
- 17 『〈安中／草三伝〉^{おくれぎきはるなのうめが か}後開榛名梅香』一、二、五、七～十一編
明治18年(1885)7月～19年6月刊 発行：朝香屋
- 18 『^{きょうこつ}〈^{かんばし}侠骨今に^{ぞくたん な なまぐさ}馨く／^{まつ}賊胆猶ほ^{みさおびじん}腥し〉^{いきうめ}松の操美人の生理』
明治20年(1887)4月刊 発行：大阪・駸々堂
- 19 『〈^{きょうこつ}侠骨今に^{かんばし}馨く／^{ぞくたん な なまぐさ}賊胆猶ほ^{まつ}腥し〉^{みさおびじん}松の操美人の生理』
明治20年(1887)4月刊 発行：新庄堂
- 20 『〈^{きょうこつ}侠骨今に^{かんばし}馨く／^{ぞくたん な なまぐさ}賊胆猶ほ^{まつ}腥し〉^{みさおびじん}松の操美人の生理』
(上巻) (明治21年5月刊 発行：大川屋・栄泉堂)
- 21 『〈^{きょうこつ}侠骨今に^{かんばし}馨く／^{ぞくたん な なまぐさ}賊胆猶ほ^{まつ}腥し〉^{みさおびじん}松の操美人の生理』
明治21年(1888)5月刊 発行：大川屋・栄泉堂
- 22 『〈^{きょうこつ}侠骨今に^{かんばし}馨く／^{ぞくたん な なまぐさ}賊胆猶ほ^{まつ}腥し〉^{みさおびじん}松の操美人の生理』
明治21年(1888)5月刊 発行：大川屋・栄泉堂
- 【参考】『〈^{きょうこつ}侠骨今に^{かんばし}馨く／^{ぞくたん な なまぐさ}賊胆猶ほ^{まつ}腥し〉^{みさおびじん}松の操美人の生理』の初出：「やまと新聞」
連載 (『三遊亭円朝全集 別巻』角川書店、1976より)

IV 月朝と明治の演劇

- 23 明治25年7月歌舞伎座辻番付(複写) 早稲田大学演劇博物館所蔵口 22-53-200
- 24 錦絵「〈怪／談〉牡丹燈籠」明治25年(1892)7月
- 25 五代目尾上菊五郎の塩原多助 扮装写真
(『五世尾上菊五郎』安部豊編纂、1935より)
- 【参考】石版版画「東京名所 歌舞伎座」明治23年(1890)7月
- 【参考】錦絵「新富座ひみき見物穴さがし」明治16年(1883)

解題

1 三遊亭円朝について

- 1 ^{ろうげつさんし}朗月散史『三遊亭円朝子の伝』明治24年(1891)9月刊 発行：鈴木金輔
洋装1冊。紙くるみ表紙。縦17.9糎×横12.0糎。本文161頁。奥付：明治二十四年九月十五日印刷／同年同月十六日出版／編輯者 ^{いずぶちじろきち}出淵次郎吉／発行者 鈴木金輔／印刷者 中村四郎。編集者出淵次郎吉は円朝の本名。永井啓夫氏によれば、三友舎主鈴木金輔が、向島で円朝から自伝を聞き、三友舎の編集員だった水沢敬次郎(筆名朗月散史)が筆記したものである。「伝」の文章は練達で詳細をつくり、円朝の伝を最も正確に伝えるものとして知られている(永井啓夫『新版 三遊亭円朝』)。展示箇所は、17歳の円朝が、流派の元祖三遊亭円生の墓に参詣し、衰微した流派を盛り返すために、自分の落語が上達して天下に名を上げることができるようにと願う場面。

2 三遊亭円朝書簡(年不明8月28日、福地桜痴宛) 封筒付

福地桜痴(源一郎、1841〔天保12〕-1906〔明治39〕)は明治期の官僚・新聞記者・作家・劇作家。「東京日日新聞」で社説に筆をふるい、のち明治22年(1889)に歌舞伎座を設立して主に九代目市川団十郎のために戯曲を執筆した。円朝と親交があり、円朝が西洋の小説などから翻案した作品については、原作を紹介したらしい(『英国孝子之伝』『松の操美人の生埋』参照)。明治期には福沢諭吉と並び称された人物である。

本書簡には、封筒が附属している。封筒は縦19.7糎×横4.7糎。表「池の端茅町／福地様／御奥／南二葉町式十三番地 三遊拝」。裏「四月廿六日」。「榛原製」と印刷されている。朱色の扇の模様がある。

書状そのものは縦16.6糎×横47.1糎。翻刻は展示参照。日付は「八月廿八日」であり、封筒の日付と齟齬するので、書状と封筒は元は別だったものを後に取り合わせたか。便箋は緑の扇の模様。模様の意匠自体は封筒と同じ。内容に出てくる足利は円朝にゆかりのある土地であり、養女みやの実家がある。書簡では足利に赴き、東京に帰ったあとすぐ八王子へ出かけているようだが、円朝がそうした行動を取った時期を確定できなかった。ともあれ、円朝の流麗な筆蹟を御覧いただきたい。

【参考】^{かぶらさきよかた}鏑木清方「三遊亭円朝像」昭和5年(1930) 東京国立近代美術館所蔵(『明治の古典 カラーグラフィック 1 怪談牡丹燈籠・天衣紛上野初花』学習研究社、1982より)

鏑木清方(1878〔明治11〕-1972〔昭和47〕)は明治～昭和期に活躍した日本画家。明治24年(1891)浮世絵師の水野年方に入門し、新聞小説の挿絵などで活躍し、樋口一葉の肖像など日本画の名作も数多く描いた。清方の父は三遊亭円朝と親交の厚い^{じょうのさい}條野採菊であり、清方自身も円朝と交流があった。明治28年(1895)には、円朝の足利・栃木・佐野などへの旅行に同行している(永井啓夫『新版 三遊亭円朝』参照)。この肖像画は五十歳代の円朝の面影を描いたものといい、高い評価を得ている(永井氏同書)。

II 「怪談牡丹燈籠」

あらすじ 旗本飯島平左衛門の娘お露^{つゆ}は浪人萩原新三郎^{はぎわらしんざぶろう}に恋をしやがて亡くなる。盆の十三日、お露と女中お米が新三郎家に牡丹燈籠を提げて立ち寄り、以後毎夜訪れる。二人が死霊であることが知れ、新三郎はお札を貼って引きこもるが、新三郎家に入入りし雑用をこなしていた伴蔵^{ともぞう}は死霊から百両もらってお札をはがし、金無垢の海音如来像を奪って女房お峰^{みね}と共に中山道栗橋へ逃げる。新三郎は死ぬ。一方、飯島平左衛門は新しく雇った若党黒川孝助が、かつて往来で自分が討った男の息子であることを知る。平左衛門の妾お国と隣に住む宮野辺源次郎が不義をはたらき平左衛門を殺そうとするので、ある夜孝助が源次郎と思って鑓で突くと、それは平左衛門であった。平左衛門は孝助に父の敵をとらせたのである。孝助は相川新五兵衛の家^{いへ}に立退き、娘お徳と婚礼を挙げたあと、逃げたお国と源次郎を追って主君の仇討ちの旅に出る。栗橋の伴蔵にお国が近づき、女房お峰は激しく嫉妬する。伴蔵は幸手堤で女房を殺し、根津に埋めておいた如来像を掘り出しに行くが、御用となる。孝助はお国と源次郎を追い本懐を遂げる。

「怪談牡丹燈籠」は若林珪蔵^{かきん}らにより初めて速記本として出版された人情噺である。

若林珪蔵（1857-1938）は明治15年（1882）、田鎖綱紀の開いた速記法の講習会を終了し、速記法研究会を創設。明治17年、東京稗史出版社の依頼で、円朝の人情噺の速記を引き受ける。十五日間でひとまとまりの円朝の話を速記しに酒井昇造とともに寄席に通い、一席を一回として「牡丹燈籠」を毎土曜日に発行したところ、おおいに売れ、速記の宣伝にもなったという（『若翁自伝』若門会、1926年）。その後も円朝の人情噺は続々と速記本として刊行された。また、明治18年には松林伯円の講談『安政三組盃』^{あんせいみつぐみさかずき}も速記として刊行された。

「円朝物の速記本は、円朝の真の芸を伝えていないと批判され」るが、速記には限界があり、むしろ「円朝の高座を出来得る限り忠実に写しとり文字化するべく、想像にあまる苦心を重ねた若林珪蔵、酒井昇造両氏の功労に謝意を捧げるべき」とする永井啓夫氏の言の通り（『新版 三遊亭円朝』）、今日円朝の話を文字として読めることは貴重である。

3 『怪談牡丹燈籠』初版 全十三編のうちの五・六編 明治17年（1884）8月・9月

刊 発行：東京稗史出版社

和装2冊。共紙表紙で縦19.0糎×13.0糎。表紙：「三遊亭円朝演述」「若林珪蔵筆記」「〈恠／談〉牡丹燈籠 第五（六）編」「東京稗史出版社」。薄墨で描いた牡丹の花の絵に、藍で雨を描く。五編の表紙見返しに刊記：明治十七年七月廿五日御届／明治十七年八月出版／筆記者 若林珪蔵／出版所 東京稗史出版社。同じく五編の表紙見返しには、速記の筆記文体とその訳文、および社告が載る。六編の表紙見返しの刊記：明治十七年七月廿三日御届／同九月出版。定価一部金七銭五厘。内題「怪談牡丹燈籠」。柱刻「怪談牡丹燈籠 第五（六）編 十九（～丁付） 東京稗史出版社」。五編は三十三丁まで、六編は三十六丁から始まり、次に三十五、三十七～四十七丁。五編裏表紙見返しに『世路日記』等の広告、裏表紙は府外売捌所86軒の連名。六編の裏表紙は欠か。

初版は全十三編であり、日本近代文学館より復刻版も出ている。本学での初版本の所

蔵は2冊だが、初版の雰囲気味わっていただきたい。速記の文体も興味深い。

4 『怪談牡丹燈籠』再版（明治17年9月）と初版の合綴 全十三編 発行：東京稗史出版社

和装2冊。ほぼ縦18.6糎×横12.7糎。濃紫色表紙、左肩書題簽、「恠談牡丹燈籠 自第壹（七）至第六（十三）号 貳ノ壹（貳）」印（朱）「田中英蔵」。第壹編の表紙見返しに、「明治十七年七月廿五日御届／明治十七年八月出版／明治十七年九月再版」とある。また、第2冊目の第七編表紙見返しに、筆記文体・社告とともに「明治十七年七月廿三日御届／明治十七年七月出版」とあり、こちらは初版の刊記である。（筆記者・出版者は初版におなじ）。再版本と初版本とを一緒に綴じたものか。

5 『怪談牡丹燈籠』別製本 全十三編 明治18年（1885）2月別製本御届 発行：東京稗史出版社

和装4冊。本書については、清水康行氏「鶴見大学図書館蔵『^恠牡丹燈籠』別製本について—その書誌的紹介ならびに初版本との語法上の相違点—」（『鶴見大学紀要 国語・国文学編』20、昭和58年3月）および「言語資料として見た速記本『^恠牡丹燈籠』の二重性」（『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』同年）が詳しく紹介され、緻密に論じておられるので参照していただきたい。ここでは簡単に書誌を記すが、本書は展示本3や4とは体裁をあらため、坪内逍遙の序文や口絵を加えた装幀となっている。

ほぼ縦18.2糎×横12.7糎。樺色表紙、左肩刷題簽、子持ち枠に「〈恠／談〉牡丹燈籠 卷之一（～四）」。表紙に牡丹の花と雨、裏表紙に○に朝の印、東京稗史出版社の印を空押し。卷之一、内表紙（本来は見返しに貼られ見えないものか）「三遊亭円朝演述／若林^珣蔵筆記／〈恠／談〉牡丹燈籠 第四編／東京稗史出版社」、内表紙見返しに竹を繫いだ枠の中に「三遊亭円朝演述／若林^珣蔵筆記／〈恠／談〉牡丹燈籠 全／東京稗史出版社」とある。続いて、春のやおぼろ（坪内逍遙）による「牡丹燈籠 序」（年月記載なし）が1丁半（丁付 一オ～二オ）。国峯による口絵二葉（二ウ～四オ）。「古道人」による「牡丹燈籠序」（四ウ）。また、丁付なしの、1丁分の若林^珣蔵の「序詞」。以下、初版本と編数、回数、一行あたりの行数・字配り、柱刻は一致する（第六編の、三十五、三十六丁の丁付は正しく直っている）。巻四の裏表紙見返しには、「明治十七年七月二十三日出版御届／同 十月八日拾篇以下板権免許／同 十八年二月廿六日別製本御届／筆記者 若林^珣蔵／東京下谷区徒士町壹丁目六十壹番地／東京京橋区南伝馬町三丁目十三番地／発兌 東京稗史出版社」とある（ここでは住所も記した）。展示箇所は、逍遙の序の部分と、奥付を中心とした。他に伴蔵に殺されたお峰が下女おますに取憑く場面。

なお、国文学研究資料館にもこの「別製本」が所蔵されるが、巻一の見返しは赤い紙を使っている。また、奥付の若林^珣蔵の住所は「東京下谷区徒士^男壹丁目六十壹番地」（傍線引用者、「町」の誤り）となっている。同じ別製本ではあるが、展示本とは細部が異なるようである（本文の精査はしていない）。

6 『怪談牡丹燈籠』再版 明治18年（1885）5月刊 発行：文事堂

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.8糎×横12.9糎。四六判。表紙：「三遊亭円朝演述」「〈恠／談〉牡丹燈籠 全」「東京稗史出版社」「東京新橋竹川町知新堂石版部製」。石版で、題名の周囲に牡丹の花と蝶を描く。さらにその周囲に花を繫いだような模様。奥付：明治十七年七月二十三日出版御届／同十月八日拾篇以下版権免許／同十八年二月廿六日別製本御届／同五月十八日版権譲受御届／同同月同日再版并ニ別製本御届／出版人 市川路周／発兌 文事堂／売捌 全国各地書林。定価付なし。但し国立国会

図書館所蔵本奥付には、定価一円十五銭と印がある。一～四丁は和紙袋とじで、春のやおぼろ（逍遙）の序、国峯の口絵見開き二葉（色刷）、古道人の序。頁付をあらためて、若林珪蔵の序詞が4頁。さらに頁付をあらため、本文が全314頁。1頁約37字×12行。本文の上には横線があり、その上に「怪談牡丹燈籠第〇編」とある。牡丹燈籠の初版本を出版した東京稗史出版社は明治18年5月ごろ事業に失敗し、著作権は文事堂に移った。本書の表紙には「東京稗史出版社」とあり、東京稗史出版社が石版の表紙も準備していたこと、その後出版は文事堂が行なったことがわかる（磯部敦「明治十年代の新興出版社—東京稗史出版社について—」参照）。

7 『怪談牡丹燈籠』5版 明治19年（1886）7月刊 発行：文事堂

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.4糎×横12.6糎。四六判。表紙の体裁は展示本6と同じだが、「東京稗史出版社」ではなく「東京文事堂発兌」とある。「東京新橋竹川町知新堂石版部製」の文字はない。また、表紙の題や牡丹・蝶の絵は展示本6と同じだが、その周囲の様子は横縞で、6とは異なる。奥付：明治十七年七月二十三日出版御届／同十月八日拾篇以下版權免許／同十八年二月廿六日別製本御届／同五月十八日版權譲受御届／同同月同日再版并ニ別製本御届／同十月三版御届／同十九年一月廿三日四版御届／同年二月出版／同年七月一日五版御届／同七月出版／出版人 市川路周／発兌文事堂／売捌 全国各地書林。定価金一円五十銭。冒頭部は和紙袋とじではなくなり、春のやおぼろの序が洋紙で3頁分。展示本5や6にあった匡郭は無く、刷りも悪い。次に、翠軒竹葉の署名のある口絵が6頁分ある。国峯の口絵を真似たもの二葉と、相川新五兵衛などを描いたもの一葉。次に古道人の序が1頁。若林の序が3頁。本文は頁をあらため、全237頁。1頁に約42字×15行。同じ「5版」の刊記を持つ本でも、諸本で頁数などにさまざまな異動があるという（山本正秀「『怪談牡丹燈籠』の初期刊本と逍遙の序文」参照）。

8 『怪談牡丹燈籠』再版 明治40年（1907）8月刊 発行：文事堂

洋装1冊。紙くるみ表紙。縦21.6糎×横14.2糎。表紙に牡丹燈籠や団扇などを描き、「三遊亭円朝講演」「〈怪／談〉牡丹燈籠」。裏表紙に「東京文事堂発行」。内表紙の文字も表紙に同じ。春のやおぼろの序（一～四頁）。「蕉堂」の挿絵一枚折り込み。奥付：明治十七年七月二十三日印刷／同十七年八月八日発行／同四十年八月十五日再版発行／速記者 若林珪蔵／発行者 市川周蔵／印刷者 横田五十吉／発行所 文事堂。本文284頁。1頁約37字×13行。明治後期にも「牡丹燈籠」が出版された例として掲げた。簡単に「再版」とだけある。文事堂が未だ版權を持っていることがわかる。

【参考】二葉亭四迷「余が言文一致の由来」 初出：雑誌『文章世界』明治39年（1906）

5月（『二葉亭四迷全集』第四卷、筑摩書房、1985より）

【参考】二葉亭四迷『〈新／編〉浮雲』第一編 明治20年（1887）6月刊 発行：

金港堂

ふたばていしめい

二葉亭四迷（1864-1909）が坪内逍遙の勧めにより、円朝の速記本などに学んで、最初の長編小説『浮雲』の文体を創り出したと言われるのは周知のことである。ここでは、二葉亭四迷自身が回想して述べている文章、および、『浮雲』初版本の体裁を見ていただくために、参考として掲出した。『浮雲』は表紙にある通り、著者の名義は逍遙になっている。

III 円朝速記本の世界

『塩原多助一代記』 あらすじ

浪人塩原角右衛門は仕官の金のために、息子多助を同姓同名の上州沼田に住む大百姓塩原角右衛門に養子にやる。成長した多助は不義者の継母おかめと妻お栄えいらに命を狙われ、愛馬あおの青と別れて江戸にやってくる。炭商山口屋で奉公するうち実の両親に巡り会うが、対面を許されず発奮、商いに精を出して計り炭屋を考案し独立し栄える。豪商藤野屋の娘お花は多助に恋し、やがて嫁入りし、働き者の夫婦となる。一方継母おかめはおちぶれる。これらの筋に悪人道連小平みちづれや股旅お角こへいらが絡んで、強請またたびやたかりかくなどを働く。

勤勉実直な多助の話は小学校修身教科書にも載った。実在の多助は太助と書く。明治九年、画家柴田是真しばたぜしん（1807-91）から塩原家の怪談を聞いた円朝は上州に出かけて取材をし多助の話を作り上げたが、怪談ではなく立身出世譚となった。

9 『〈円朝／叢談〉塩原多助一代記』 刊年不明（明治19年7月版權譲請） 発行：

武部滝三郎

和装3冊。全十八編十八冊の初版を合冊した版。3冊ともほぼ縦21.5糎×横14.5糎。暗緑色表紙。空押しされた轡の模様と馬らしき模様がみえる。左肩刷題簽、子持ち枠に「〈円朝／叢談〉 塩原多助一代記 一（～三）」。

奥付：第3冊目に、明治十八年一月廿七日版權免許／明治十九年七月五日版權譲請御届／筆記者 若林珪蔵／出版兼発兌人 武部滝三郎。奥付左に、『英国孝子之伝』全八冊の広告がある。定価付なし。第1冊目の表紙見返しに「三遊亭円朝演述」「若林珪蔵筆記」「〈円朝／叢談〉 塩原多助一代記 第五編」「速記法研究会」とあり、薄墨で轡の模様を描く。この見返しは、初版では表紙であった。画は塩原家の怪談を円朝に教えたという柴田是真による。第2、3冊の見返しは白紙。

第1冊、表紙以降は、まず、「炭売のおのが妻こそ黒からめ」（重五、「炭俵の巻」、『冬の日』所収）ではじまる円朝の「序詞」（年月記載なし）が1丁分ある。次に明治十七年十二月付の若林の序文が半丁あり、塩原多助を刊行する顛末が書かれる。次に角右衛門らが仁助・お角らをこらしめる芳幾画の口絵一葉、署名なしの、おかめ・原丹治らの口絵一葉、小平・多助・お花らを描く歌川国久の挿絵一葉がある。それぞれ見開きである。

さらに、女流画家奥原晴湖おくはらせいこ（1837-1913）描く馬の絵半丁があり、全部で3丁半の口絵である。内題「塩原多助一代記」。左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記」。第三編より、「酒井昇造助筆」が加わる。柱刻「塩原多助一代記第一（～十八）編 一（～丁付）速記法研究会」。丁付は各編個別についているが省略する。第1冊は第六編までで本文は計76丁。第2冊は第七編より十二編までで計63丁。第3冊は第十三編より十八編までで計61丁。半丁に約30字×12行。

国立国会図書館の初版本十八冊によれば、芳幾と無署名の口絵は第一編に、国久の口絵は第二編に附属のもの。また、円朝の序詞は第八編冒頭に綴じられている（柱刻には第四編とある）。これらをあらためて巻頭に持ってきて体裁を整えたのがこの合冊本か。

若林珪蔵によれば、円朝は「牡丹燈籠」（初版）の体裁を気に入らず、「あんな汚ない本では御鼻先へ上げるにも誠に上げにくくて困る、こんど出すならもう少し美しい本にして

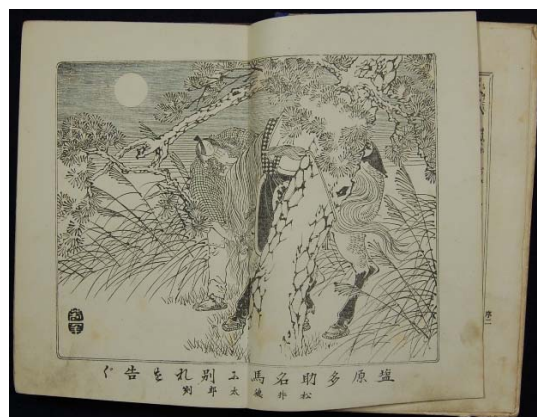
貰ひたい」と言うので、速記法研究会は是真、晴湖などにも頼んで贅沢な造りの本にしたという（鈴木古鶴「円朝遺聞」『円朝全集』所収）。費用がかかり、利益は得られなかったという。展示本13の『英国孝子之伝』の造本も『塩原多助』と似ており、注意が払われていたことがわかる。奥付からすると、展示本は速記法研究会から明治19年7月に武部滝三郎へ著作権が譲渡された後の版である。著作権免許の日が明治18年1月27日となっているが、日本近代文学館所蔵の同じ3冊本は、著作権免許の日が明治17年12月11日となっており、出版者も武部ではなく速記法研究会。18年1月27日は初版の第五編以降の著作権免許取得日で（初版奥付による）、第一～四編の著作権免許は17年12月11日。展示本の第1冊見返しが「第五編」となっていることにも関係すると思われるが未詳である。

10 『〈円朝／叢談〉塩原多助一代記』別製本 刊年不明（明治20年1月別製本御届） 発行：武部滝三郎

洋装1冊。総クロス。縦18.5糎×横13.0糎。四六判。表紙は臙脂色で空押しの模様あり。背表紙に金色の文字で「〈円朝／叢談〉塩原多助一代記 完」とあり、馬の絵がある。奥付：明治十八年一月廿七日著作権免許／同二十年一月六日別製本御届／演述者 三遊亭円朝／筆記者 若林珪蔵／出版人 武部滝三郎。定価金一円七十銭。奥付の次の頁に、「東京日本橋本石町 上田屋」とあり、『英国孝子之伝』の「絵入／美本 西洋綴全一冊」定価三十五銭の広告がある。冒頭、円朝の序詞（3頁分）。口絵、絵師署名はなく、展示本9の口絵四葉に似せて描いている（7頁分）。内題「塩原多助一代記」。内題左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記」。本文全425頁。1頁に約30字×12行。本書も著作権免許の日は明治18年1月27日である。

11 『〈円朝／叢談〉塩原多助一代記』別製合本 明治22年（1889）5月刊 発行：覚張栄三郎

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.7糎×横13.1糎。四六判。表紙：「〈円朝／叢談〉塩原多助一代記」「若林珪蔵速記」「習古」。石版で、多助とお花の絵が描かれる。奥付：明治十七年十二月十一日著作権免許／同二十年四月三十日別製合本御届／同二十二年四月廿九日印刷／同五月一日出版／発行者 覚張栄三郎／演述者 三遊亭円朝／筆記者 若林珪蔵／印刷者 井口米次郎。正価五十銭。冒頭、円朝の序詞。序一～序三と頁が入っている。版面は展示本10に同じ。口絵見開き三葉、芳年筆。一枚目は多助が馬の青と別れる有名な場面（松井徳太郎刻、上図）。二枚目は小平・原丹治ら6人を描く。三枚目は多助・お花など6人を描く。内題「塩原多助一代記」。内題左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記」。本文全294頁。1頁約40字×13行。本書の著作権免許の日は明治17年12月11日である。展示本10とは別系統の本か。



しんけいかさねがふち
『真景累ヶ淵』あらすじ

根津の針医皆川宗悦は、貸金の取り立てのことから小日向の旗本深見新左衛門に殺される。新左衛門は宗悦の亡霊と間違っみながわそうえつて妻を殺し、家は改易となる。深見の実子新五郎と新吉はそれぞれ宗悦の次女お園、長女で富本の師匠豊志賀とよしがとの因縁が生まれる。新吉は豊志賀と恋仲だったが、豊志賀は羽生屋はにゅうの娘お久への嫉妬から死を遂げ、女房を持てば七人までとり殺すと遺言。新吉はお久と下総羽生村に落ち延びるが、豊志賀の霊に悩まされ、お久を殺す。新吉は村でお累、お賤といった女性達と出会い、殺人の罪を重ねる。このことに羽生村名主惣次郎家の仇討ち話がからむ。

「累かさね」ものの怪談は古くから伝えられており、下総国羽生村しもうきのくにはにゅうむらに住む累が、夫与右衛門に殺され、与右衛門の六人目の妻が生んだ娘の菊に取り憑くが、祐天上人の力で成仏するという説話がある。円朝は説話を取り入れつつ安政6年(1859)21歳の時に本作を創作し、その後も練り上げた。最初は道具を用いた芝居噺であったという。明治になってから取られた速記の冒頭部分「幽霊と云ふものは無い、全く神経病だと云ふ事に成りましたから、怪談は開化先生方はお嫌なきらひ成被事で御坐います」とのくだりは有名である。本作の「真景」には「神経」をきかせている。しかし冒頭部分を読み進めると、円朝は幽霊話を否定しているわけではないこともわかる。

しんけいかさねがふち
12 『真景累ヶ淵』明治21年(1888)5月刊 発行：井上勝五郎(薫志堂)

ボール表紙本1冊。背クロス。縦17.8糎×横12.7糎。四六判。表紙：三遊亭円朝口述／真景累ヶ淵／東京薫志堂梓。石版で男女一人ずつが描かれる。奥付：明治二十一年五月廿六日印刷／同年五月廿九日出版／発行者 井上勝五郎／印刷者 鈴木金輔。定価金四十銭。「化作」による序(明治戊子卯月中旬)(1頁分)、大蘇芳年による口絵二葉(3頁分)のち本文(全343頁)。1頁に約40字×16行。本文冒頭に、三遊亭円朝口述／小相英太郎筆記とあり。

延広真治氏は、本作品が「やまと新聞」明治20年9月より21年1月にかけて連載されたと推測、指摘している(延広真治「三遊亭円朝「真景累ヶ淵」」参照。「やまと新聞」は東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫において明治20年8月より21年4月まで欠号)。

『英国孝子ジョージスミス之伝』あらすじ

元前橋藩の重役春見丈助は維新後神田で旅籠屋を開いているがうまくいかない。そこへ旧知の前橋堅町の清水助右衛門が、事業を興すための資金として三千円を持って上京、春見を信頼して金を預ける。春見丈助はもとの下役井生森又作と謀り、助右衛門を殺して金を奪い、旅籠屋を成功させる。

助右衛門の妻と長女おまき・長男重二郎は貧苦にあえぎ、父の仇とも知らず丈助を頼るが、丈助は冷たくあしらう。丈助の娘おいさは重二郎に恋をする。助右衛門の遺体を始末して行方をくらましていた又作を丈助は殺す。やがて、屋根屋の江戸屋清次により、丈助の悪事があばかれる。おいさの心を知った丈助は自害し、おいさが実の娘ではないことを告げ、おいさと重二郎を結ばせる。江戸屋清次はおまきと結ばれる。

永井啓夫氏は本作の原作を円朝に紹介したのは福地桜痴であろうとしている（『新版 三遊亭円朝』）。延広真治氏により、本作の原作がイギリスの小説家チャールズ・リード（Charles Reade）の“Hard Cash”（1863）であることが明らかにされた（延広真治「『英国孝子之伝』と“Hard Cash”」）。また、本作は、劇化された際、明治の名優九代目市川団十郎（1838-1903）が主演した作品で、九代目が円朝原作の芝居に出演したのはこの作品のみ（明治19年1月新富座『西洋噺日本写絵』）。展示本16の版からは、九代目との関係が窺える。

13 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』明治18年（1885）7月刊 発行：速記法研究会

和装1冊。全八編を合わせて一冊としたもの。縦21.7糎×横14.3糎。灰色表紙、左肩に刷題簽、子持杵、「英国孝子伝 全」。奥付：明治十八年四月十日版權免許 同年七月出版／速記法研究会／会主筆記者 若林珪蔵。定価、一部金九錢、全部前金五十六錢。奥付左に『塩原多助一代記』合本三冊や松林伯円『安政三組盃』初編（既発）、円朝『業平文治漂流奇談』の出版広告がある（『業平文治漂流奇談』は予告）。表紙見返しに、桃色の地に白抜きに瓦を散らした模様で、「三〔 〕朝演述」（〔 〕内スレで見えず）「若林珪蔵筆記」「〈西洋／人情話〉英国孝子〈ジョージ／スミス〉之伝 第四編」「速記法研究会」とある。これは、展示本9の「塩原多助」同様、全八編を個別に刊行した時の第四編の表紙を見返しに用いたものと思われる。口絵、エリザとジョージ・スミス（おいさと清水重二郎にあたる）を描いた一葉、人力車夫加十・春見丈輔・清水娘おまき・侠客江戸屋清次を描いた一葉、清水助右衛門・井生森又作・春見娘おいさ・孝子重二郎を描いた一葉の計三葉（色刷）。梅蝶楼国峯画。続いて明治十八年六月付の若林珪蔵の序文半丁。『塩原多助一代記』が全備に近付いたので、読者からの要求に従い本書を出版することになったと述べる。内題「英国孝子之伝」、内題の次に第一編では「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記／伊藤新太郎助筆」とある。二編からは、助筆は酒井昇造に替わっている。柱刻「英国孝子之伝 第一（～八）編 一（～丁付） 速記法研究会」。丁付は、国会図書館所蔵の初版を参照すると、各編が単独で刊行された初版の段階から通して付いており、本文の始まる丁が一、最終丁は八十一だが、展示本は第八編の丁付のみ四十七～五十三となっている。本文、約30字×13行。挿絵は国峯・国久。個別に刊行された初版八冊の刊記は、明治18年6月（第一冊と五冊）と7月（その他）。本書はそれを合綴したもの。

14 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』刊年不明（明治18年4月版

権免許、明治19年7月序） 発行：武部滝三郎

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.2糎×横12.5糎。四六判。表紙：「三遊亭円朝演述」「〈西洋／人情話〉英国孝子之伝 全」。石版で、洋装の二人の人物が描かれる。ジョージ・スミスとエリザにあたるか。奥付：明治十八年四月十日版權免許／速記法研究会／筆記者 若林珪蔵／発兌元 武部滝三郎 武部の住所は京橋区常磐町貳番地。奥付の左に、『塩原多助一代記』の合本三冊の広告が載る。

表紙の次に、初版本にあった若林珪蔵の序文が草書体で載るが（2頁分）、明治十九年七月付となっている。内題「英国孝子之伝」。内題左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記／伊藤新太郎助筆」。本文は全199頁。1頁約25字×12行。

国会図書館所蔵本は、同じ武部滝三郎発行であるが、奥付に明治19年10月26日別製本御届とある。表紙の図案も異なり、口絵は初版と同じ図柄が三葉あるが、尾形月耕が改めて描いたもの。さらに九代目市川團十郎の揮毫「章志貞教」（『礼記』の一節）が1頁入る。若林の序文2頁は、展示本と同じ版面で、明治19年7月の記載がある。国会本も全199頁、1頁約25字×12行で、本文も展示本と同じ版面かと思われる。



15 『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』明治24年（1891）4月訂正

出版 訂正兼発行：覚張栄三郎（上田屋本店）

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.8糎×横13.0糎。四六判。表紙：「三遊亭円朝演述」「若林珪蔵速記」「英国孝子伝」「東京上田屋発行」「習古」。石版で、洋装の男女と、カーテンの影からそれを覗く女性一人が描かれる。ジョージ・スミスとエリザにあたるかと思われるが、もう一人の女性は不詳。奥付：明治十八年四月十日版權免許／明治廿四年四月一日印刷／明治廿四年四月日訂正出版／演述者 三遊亭円朝／訂正兼発行者 覚張栄三郎／印刷者 梶山尚三郎／発兌元売捌 上田屋本店／売捌 上田屋支店。定価付なし。

表紙の次に、初版本にあった若林珪蔵の序文が草書体で載ることは展示本14に同じだが、字体は異なり、年月の記載もない。また、序文2頁の間に、見開き（2頁分）で芳年の挿絵（6人の人物）が描かれる。内題「英国孝子の伝」。内題左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記／伊藤新太郎助筆」。本文は全199頁。1頁約25字×12行。展示本14とは活字の異なる部分があり、版面は違う。「訂正」とは何を訂正したのか、細かく追究できてはいないが、字句の訂正はあるか。

16 『^{こがね}黄金の罪』（『〈西洋／人情話〉英国孝子ジョージスミス之伝』改題）

明治24年（1891）4月訂正出版 発行：上田屋本店

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.4糎×横13.0糎。四六判。表紙：「三遊亭円朝口述」「若林珪蔵筆記」「黄金の罪」「東京上田屋蔵版」。石版で、九代目市川團十郎（春見丈助役）と初代市川左団次（江戸屋清次役）の似顔とそれぞれの紋が描かれる。内表紙は桃色の紙で「三遊亭円朝口述／大蘇芳年挿画／黄金の罪／東京 上田屋蔵版」。

奥付：明治十八年四月十日版權免許／明治廿四年四月一日印刷／明治廿四年四月日訂正出版／演述者 三遊亭円朝／訂正兼発行者 覚張栄三郎／印刷者 角張敬四郎／発兌元 売捌 上田屋本店／売捌 上田屋支店。定価付なし。

内表紙の次に、初版本にあった若林珪蔵の序文が草書体で載る。字体は展示本 14 に同じだが、年月の記載はない。また、序文 2 頁の間に、見開き（2 頁分）で芳年の挿絵（6 人の人物）が描かれるのは展示本 15 に同じ。内題「黄金の罪」。内題左下に「三遊亭円朝演述／若林珪蔵筆記／伊藤新太郎助筆」。本文は全 199 頁。1 頁約 25 字×12 行。精査していないが、展示本 14 と活字は同じに見え、版面は 14 と同じか。

おくれぎきはるなのうめが か
『後開榛名梅香』 あらすじ

草三郎は幼い時に両親に別れて武士恒川半三郎に奉公・入門し、剣術の腕をみがいたが、主人恒川の危難を救うために窃盗をし、罪をかぶる。のちには牢を抜け、上州下秋間村にて仲間の両親に出会い、子供として仕え、饅頭を売り歩く。のちにまた恒川のために盗みをはたらき、上州榛名にて飯炊き梅吉となって隠れ住み、恒川の娘を救ったり、実母と妹に会ったりするが、最後には捕縛される。義侠心に厚く、常に人々の為^{あんなかそうざ}に行動する「安中草三」の話。

「安中草三」は画家飯島光峨婦人から聞いた「榛名の梅吉」の話、松林伯円が演じていた「あんもの草三」という読み物、上州伊香保の福田屋竜造という親分から聞いた話を加え、作り上げたものという。草三郎は上州安中に幕末頃実在した饅頭売りで、美男であったという（永井啓夫『新版 三遊亭円朝』）。この話のはちに、講釈や浪花節といった芸能に受け継がれていった。

17 『〈安中／草三伝〉後開榛名梅香』一、二、五、七～十一編 明治 18 年（1885）

7 月～19 年 6 月刊 発行：朝香屋

和装の活字本 8 冊。第一編、縦 18.2 糎×横 12.4 糎。第二編以降はほぼ縦 18.6 糎×横 12.8 糎。表紙：和紙の共紙表紙、第一編のみ表紙の意匠が他の各編と異なる。第一編は薄い藍色で、梅の花の咲く枝が描かれる。他の各編は、梅の咲いた枝に雪のつもった絵で、梅は赤、枝はぼかしの入った黒色。右上に「三遊亭円朝演述」「酒井昇造筆記」、中央に「〈安中／草三伝〉後開榛名梅香」、その下に「第〇編」（第一編にはなし）、左下に「朝香屋」。第一編の外題は勘亭流の文字だが第二編以降は異なる。また、中央の題名は、第二編以降は題簽風に囲んである。奥付：明治十八年一月二十二日版權免許／明治十八年七月出版／演述者 出淵次郎吉／筆記者 酒井昇造／出版人 三浦省吾／発兌元 朝香屋 第一編は、出版人に貼紙がしてあり、貼紙に三浦省吾の名前と住所が記される。出版年月、二編は明治 18 年 8 月、五編は 18 年 12 月、七編は 19 年 2 月、八編は 19 年 3 月、九編は 19 年 4 月、十編は 19 年 5 月、十一編は 19 年 6 月。第一編は本文 16 丁、二・五・七～十編は 14.5 丁、十一編は 12.5 丁。本文は半丁につき約 27 字×13 行。柱刻「後開榛名梅香 第〇編 △（丁付）朝香屋出版」。内題「〈安中／草三〉後開榛名梅香」。第一編、表紙見返しに朝香屋主人の口上。裏表紙と裏表紙見返しは出版広告。第二編の裏表紙は第二編の出版遅延について朝香屋主人の口上。

国立国会図書館には第一編の改正版（明治 18 年 10 月出版）が所蔵されており、これには仮名垣魯文による序文（明治十八年十月八日付）、朝香楼芳春による口絵三葉が追加さ

れている。さらにその裏表紙の朝香屋主人の口上（明治十八年十月二十日付）によると、これまでに三編まで出版したが、二編以降は用紙・画工・彫刻・印刷を精選し、原稿は円朝の再閲を経て、絵組も円朝の考案を取ったとある。二編以降の体裁が一編と異なる理由がこれでわかる。さらに第一編に魯文の序と口絵を付けて、改正版を出版したとある。『塩原多助一代記』や『英国孝子之伝』と同様、造本にこだわりが見られる。

単行本では未完で、のち「やまと新聞」（後述）に、明治21年11月18日～22年4月27日まで合計125回連載された。

展示は、草三郎が山中で狼と戦う場面と、草三郎が追っ手から逃れて川船へ飛び込む場面を掲げた。

『^{きょうこつ}く^{かんぼし}俠骨^{ぞくたん}今^なに^{なまぐさ}馨^{まつ}く^{みさおびじん}／^{いきうめ}賊胆^い猶^ほほ^し腥^しし』^{まつ}松の^{みさおびじん}操美人の^{いきうめ}生理』あらすじ

大名金森家の元重役で浪人中の^{かゆかわずしよ}粥河^い凶書^い（原作のヴリウ）は池上に詣でて茶屋の娘お蘭（カウラン）を見初める。お蘭はもと武士の娘だが父が亡くなり残された母と共に茶屋を営んでいた。同じく茶屋にやってきた浦賀の廻船問屋で名主役の石井山三郎（アレキサンドル）もまたお蘭を見初めるが、粥河凶書が悪漢に襲われそうになったお蘭を助けたことで、お蘭は凶書の妻となる。しかししばらく経つと凶書は鎌倉道の竹が崎に別荘を建てると言って白金台の家に帰らなくなり、お蘭は心配のあまり竹が崎に行ってみる。夫は留守だったが、ふとしたことから家の隠し戸を知り、開けて中のはしごを下りてみると、地下が大広間になっており、凶書にいつも同行する医者^いの真葛周玄（マクス）や浪人千島礼三（チャーレ）など百五六十人ほどの人が集まっていた。凶書は盗賊団の首領だったのである。お蘭が気絶すると、凶書はそのままお蘭を生き埋めにする。偶然そのことを知った石井山三郎がお蘭を助け出し、凶書の正体を聞き、果たし合いをすることとなる。凶書は最後まで改心せず卑怯な手を使ったが、山三郎に味方する江戸屋の半治や芸者小兼らの働きもあってついに敗北し、最後はお蘭の貞節心^いに感じて自害する。

当初「やまと新聞」に連載された速記が、さまざまな形で単行本化されたことを見ていただきたい。表紙はそれぞれに工夫が凝らされ、見た目にも楽しい。

【参考】『^{きょうこつ}く^{かんぼし}俠骨^{ぞくたん}今^なに^{なまぐさ}馨^{まつ}く^{みさおびじん}／^{いきうめ}賊胆^い猶^ほほ^し腥^しし』^{まつ}松の^{みさおびじん}操美人の^{いきうめ}生理』の初出：「やまと新聞」連載（『三遊亭円朝全集 別巻』角川書店、1976より）

「やまと新聞」は明治19年（1886）10月7日に創刊され、その創刊号より、「松の操美人の生理」が連載された（小相英太郎速記、^{よしとし}挿絵^{としかた}芳年・年方）。社長の^{じやうのさいぎく}條野採菊

（1832-1902）は^{さんさんていありんど}山々亭有人ともいい、幕末は人情本の作者として活躍し、明治維新後は

「東京日日新聞」の創刊にもかかわった。円朝と親交があった。また、日本画家^{かぶらききよかた}鏑木清方は採菊の息である（前述「三遊亭円朝像」参照）。「やまと新聞」にはこの後も円朝の人情噺の速記が連載され、部数を伸ばしたという。「松の操美人の生理」は明治19年12

月 2 日まで、44 回に渡り連載された。その後、単行本が続々出版されたのは展示本 18～22 に見る通りである。なお、この人情噺はすでに明治 13～14 年、『雪月花三遊新話』とせつげつかさんゆうしんわいう題名で篠田仙果しのだせんかにより合巻になっている。

「やまと新聞」連載の第一席冒頭は以下の通りであるが、単行本収録にあたっては「当やまと新聞開業に附まして」という部分が削られるなど、各書それぞれに改変がある。ここに見えるように、円朝は福地桜痴から原話を聞いたという。ただし原話は何であるか、まだ解明されていない。

一席申上げ升ます。当やまと新聞開業に附まして、新規な咄だしを掲載たいから何かと云ふお勧誘すすめに任して、お耳慣せいようになぜうばなしました西洋人情話げだいの外題を松の操美人あらたの生理と更あらためまして、此は池の端の福地先生が口移しに教へて下すつたお咄フランス おとこだてして、仏蘭西の侠客が節婦(ママ)助けるといふ趣向。原書はベリツド、エ、ライフ (Buried a life) といふ書名ださうで、酔た時はチト言にく悪い外題でござい升が。活ながら女を土中に埋め活埋うづ いきうめに致しましたを、土中から掘出し升なほの仏蘭西の咄を日本になほ翻して地名も人名も日本の事に致し升だけた丈で (明治 19 年 10 月 7 日「やまと新聞」。読点を補いルビは適宜省略)

18 『〈俠骨今に馨く／賊胆猶ほ腥し〉松の操美人の生理』明治 20 年 (1887) 4 月刊

発行：大阪・駈々堂

ボール表紙本 1 冊。背クロス。縦 18.5 糎×横 12.7 糎。四六判。表紙：「三遊亭円朝口述」「松乃操美人之生理 全」「駈々堂本店蔵」。石版で、松の木のある野原と、遠くに寺が見える絵が描かれる。奥付：明治十九年十二月七日出版御届／明治二十年四月出版／口述者 三遊亭円朝／速記者 小相英太郎／編輯兼出版人 京都府平民 上田捨吉／発兌所 駈々堂本店／同 同出張店。駈々堂本店の所在地は大坂心齋橋北詰四番地。出張店は神戸多門通貳丁目。定価金二円。表紙の次に、大阪の小説家宇田川文海うだがわぶんかいによる序文が 7 頁分続く。序には明治二十年四月二十日の日付がある。次に無署名の口絵が三葉 (5 頁分)。その後本文に続き、本文は 134 頁まで。1 頁に約 42 字×16 行。本文が終わると奥付があり、その後、広告が 16 頁分ある。挿絵は七葉あり、芳年の署名のあるものが二葉ある。出版御届年月日は「やまと新聞」での連載終了後すぐであり、大阪の土地において、機敏に出版しようとした意図が窺える。本展示においては、大阪で出版された速記本は本書のみ。

19 『〈俠骨今に馨く／賊胆猶ほ腥し〉松の操美人の生理』明治 20 年 (1887) 4 月刊

発行：新庄堂

ボール表紙本 1 冊。背クロス。縦 18.6 糎×横 12.5 糎。四六判。表紙：「俠骨今に馨く／賊胆猶ほ腥し」「松乃操美人廼生理」「三遊亭円朝口述」「小相英太郎速記」。石版で、洋装の女性の絵が描かれる。奥付：明治廿年三月十一日御届／同年四月出版／編輯兼出版人 石島八重／発兌 新庄堂。新庄堂の所在地および石島八重の住所は日本橋区通三丁目一番地。定価五十銭。内表紙に「三遊亭円朝口述／小相英太郎速記／〈俠骨今に馨く／賊

胆猶ほ腥し) 松之操美人廻生理/東京 新庄堂発兌」とあり。石齋国保の口絵一葉(見開き、2頁分)。本文は全125頁。1頁に約42字×16行。無署名の挿絵が三葉ある。出版届出年月日は18の駿々堂版より遅いが、出版年月は奥付によれば同じ。「松の操美人の生理」は、東西の出版社から同時期に単行本化されたようである。

20 『〈侠骨今に馨く/賊胆猶ほ腥し〉松の操美人の生理』(上巻)(明治21年5月刊 発行:大川屋・栄泉堂)

和綴じ本1冊。縦17.0糎×横11.8糎。木版色刷りの表紙。表紙:「松之操」「揚州周延」。立ち姿の男性が描かれる。石井山三郎か。奥付:なし。内表紙に「三遊亭円朝口述/小相英太郎速記/〈侠骨今に馨く/賊胆猶ほ腥し〉松之操美人廻生理/東京 栄泉堂発兌」とあり。展示本19と同じ石齋国保の口絵一葉(見開き、2頁分)。本文全72頁。1頁に約40字×16行。本文は第廿六席、72頁目で終わる。裏表紙見返しは出版目録。裏表紙は浅黄色に白抜きで瓦の絵を散らして描き、中に「浅草三好町七番地」「聚」「栄」「堂」の文字が読みとれる。

国文学研究資料館所蔵本(上下巻)を参照すると、展示本は上下巻二冊のうちの上巻。国文学研究資料館所蔵本の上巻は展示本の書誌と同じ。下巻の表紙は「美人廻生理」「聚栄堂梓」「松井刀」とあり、女性が座っている姿が描かれる。お蘭を描いたものか。なお、上巻と並べると一続きの絵となる。表紙をめくると本文73頁(第廿七席)から始まり、132頁まで。奥付がある。明治廿一年五月廿五日印刷/同年同月廿六日翻刻出版/発行者 大川錠吉/印刷者 開進社 能勢新太郎/発兌元 大川屋・栄泉堂/売捌各地書林。定価五十銭。裏表紙・裏表紙見返しは上巻に同じ。

表紙に見える「聚栄堂」は大川屋の別号(『東京書籍商組合史及組合員概歴』大正11)。大川屋と栄泉堂とで共同出版したものか。

活字の版面は展示本19の新庄堂版とは異なるが、国保の口絵は同じで、また、上巻に二葉、下巻に一葉ある無署名の挿絵は19を真似てより粗末な絵となっている。

この本は洋紙の袋とじで、袋とじの合紙として洋紙一枚が挟み込まれ、一緒に綴じられているが、現状ではところどころ袋とじが切れて、中の洋紙が見える。その洋紙は別の本の本文が印刷されており、71頁と72頁の間に入っていた一枚には「独逸法律政治論纂第二」との題名がみえる。

21 『〈侠骨今に馨く/賊胆猶ほ腥し〉松の操美人の生理』 明治21年(1888)5月刊 発行:大川屋・栄泉堂

ボール表紙本1冊。背クロス。縦18.2糎×横12.3糎。四六判。表紙:「松乃操美人廻生理」「三遊亭円朝口述」「小相英太郎速記」「栄泉堂出版」。石版で女性が一人描かれる。お蘭か。奥付:明治廿一年五月廿五日印刷/同年同月廿六日翻刻出版/発行者 大川錠吉/印刷者 開進社 能勢新太郎/発兌元 大川屋・栄泉堂/売捌各地書林。定価五十銭。内表紙に「三遊亭円朝口述/小相英太郎速記/〈侠骨今に馨く/賊胆猶ほ腥し〉松之操美人廻生理/東京 栄泉堂発兌」とあり。展示本19と同じ石齋国保の口絵一葉(見開き、2頁分)。本文全132頁。1頁に約40字×16行。行数など、全頁にわたり精査はしていないが、展示本20と同じとみえ、本文は20の重版と考える。三葉ある本文中の挿絵も20と同。132頁目は、本文はすでに131頁で終わっており、ほとんど白紙のところへ最後の行に「松の操美人の生理大尾」とある。内表紙の枠の周囲に描いた模様や、口絵の枠の周囲のざりなどは、20と異なっている。

なお、国立国会図書館所蔵で同じ表紙を持つ本は、奥付が展示本と異なる。参考として記すと、明治廿一年五月廿五日印刷/同年六月十六日出版/発行者 栄泉堂水野幾太郎/発兌元大川屋錠吉/印刷者 開進社能勢新太郎。出版年月日、六月の「六」と日付の「十」

は手書き、日付の「六」は活字。「出版」の文字も手書き。

22 『〈俠骨今に馨く／賊胆猶ほ腥し〉松の操美人の生理』明治21年(1888)5月刊

発行：大川屋・栄泉堂

ボール表紙本1冊。背クロス。縦17.8糎×横12.3糎。四六判。表紙：「松之操美人生理」「三遊亭円朝口述」「東京聚栄堂梓」「習古」。石版で男女一人ずつが描かれる。石井山三郎とお蘭か。奥付：明治廿一年五月廿五日印刷／同年同月廿六日翻刻出版／発行者大川錠吉／印刷者 開進社能勢新太郎／発兌元 大川屋・栄泉堂／売捌各地書林。定価五十銭。内表紙に「三遊亭円朝口述／小相英太郎速記／〈俠骨今に馨く／賊胆猶ほ腥し〉松之操美人生理／東京 栄泉堂発兌」とあり。展示本19と同じ石齋国保の口絵一葉(見開き、2頁分)。本文全131頁。1頁に約40字×16行。活字や字配り、行数など、全頁にわたり精査はしていないが、展示本20・21と同じと見え、本文は20の重版と考える。挿絵も三葉で、20・21と同じ。ただし、本文最後に「松の操美人の生理大尾」の文字を入れ込み、21の版より1頁少なくなっている。内表紙の枠の周囲に描いた模様や、口絵の枠の周囲のかざりなどは、20とも、21とも異なっている。

IV 円朝と明治の演劇

23 明治25年7月歌舞伎座辻番付(複写) 早稲田大学演劇博物館所蔵口 22-53-200

原寸、縦46.2糎×横66.6糎。辻番付は現在のポスターにあたるもの。ここでは、早稲田大学演劇博物館ご所蔵のものを複写し展示させていただいた。円朝の『怪談牡丹燈籠』を『かいだんぼたんどうろう怪異談牡丹燈籠』として脚色上演。歌舞伎の題名は奇数が好まれるので、「異」を入れて漢字七文字としている。福地桜痴の脚色、三代目河竹新七らの補筆。辻番付ではあらずじに従って絵が描かれ、お露・お米の亡霊なども描かれている。同時上演されたのは舞踊『まくらじどう枕慈童』。

『怪談牡丹燈籠』は歌舞伎座以前にも何度も上演されており、現在見いだせる最初の記録は、明治18年(1885)5月の家満登座やまと(倉田喜弘『明治の演芸』三、小宮麒一『歌舞伎・新派・新国劇 上演年表 第六版』)。速記本が出版されてからまもなくである。家満登座は官許の劇場ではなく、見世物を興行する名目で実態は歌舞伎芝居を上演していた座であった。

歌舞伎座での上演の際は、舞台と歌舞伎座付属の茶屋へ牡丹の作り花を飾った盆燈籠五百余を吊し、さらに東京市中の氷屋へも、「歌舞伎座、牡丹燈籠、三遊亭円朝原作、盆興行」と記した盆燈籠数百個を贈ったという。さらには7月23日の隅田川の川開きに、牡丹燈籠二千個を流したという(田村成義『続々歌舞伎年代記 乾』、岡本綺堂「寄席と芝居と」)。東京中でおおいに宣伝され、その効果もあってか、大好評の大入りであったという。7月14日に初日、千秋楽は8月7日だったようである(『歌舞伎新報』1390号、明治25年8月4日)。

24 錦絵「〈怪／談〉牡丹燈籠」明治25年（1892）7月

大判錦絵三枚続。落款 応需香朝樓筆／明治廿五年七月日印刷／全年七月日出版／日本橋区長谷川町十九バンチ／印刷兼発行者 福田熊次郎。関口屋伴蔵／尾上菊五郎、伴蔵女房みね／坂東志う調。

五代目尾上菊五郎の演じた伴蔵と、二代目坂東秀調の伴蔵女房お峰。嫉妬心から、伴蔵が萩原新三郎を見殺しにして金の尊像を盗んだことをしゃべるといきり立つお峰を、栗橋宿の幸手堤で伴蔵が殺す場面。夜、雨の中で伴蔵がお峰に刃物を振り上げる不気味さと凄惨な様子が錦絵によく表れている。舞台では「本雨」（本物の水を用い雨のように降らすこと）を使ったという（森鷗外の弟・三木竹二の劇評、岩波文庫『観劇偶評』参照）。

五代目菊五郎はこの伴蔵と、忠義の侍黒川（相川）孝助、さらにお露の霊につきそうお米の霊の三役を演じた。岡本綺堂は菊五郎の伴蔵について、

わたしの感心したのは、菊五郎の伴蔵が秀調の女房にむかって、牡丹燈籠の幽霊の話をする件りが、円朝の高坐とは又違った味で一種の凄気を感じさせた事であった。と評している（岡本綺堂「寄席と芝居と」）。

25 五代目尾上菊五郎の塩原多助 扮装写真 （『五世尾上菊五郎』安部豊編纂、1935より）

『塩原多助一代記』は、歌舞伎座では明治25年（1892）1月に脚色上演され、五代目尾上菊五郎が多助と道連小平を演じた。脚色は三代目河竹新七。『怪談牡丹燈籠』と同じく、それまでも他の劇場で多く上演されてきたのを、一流の役者を擁した歌舞伎座で初めて上演した。明治の名優五代目菊五郎が円朝原作の作品に出演するのはこれが初めて。菊五郎は円朝原作の作品を上演することに慎重であつたらしい。

一体円朝さんの物は遣り悪い^{やく}といふのは、彼の通り話の旨かつた人で、敵役も立役も女房も娘も小僧も一人で話すのですから、自分の思ふ様に話せて意気も合ひますし、聞いて居る方も自然身が入りますが、芝居の方は大勢で遣ること故、銘々の意気が違つて^{とて}逆も一人で話すような工合には行きません。中には円朝さんの話を聞いた人が見物して、菊五郎のするよりも話で聞いた方が面白いなどと云はれるのがイヤですから、万事に気を付けなければならぬので…（伊坂梅雪編『五代目菊五郎自伝』）

しかし菊五郎は成功をおさめた（鈴木古鶴「円朝遺聞」『円朝全集』第13巻所収）。菊五郎はもともと、粋でいなせな江戸っ子の類の役柄を得意としていたが、質朴な塩原多助の役柄を、粗末な扮装、「がんす」という方言の工夫などで、見事に演じたという（三木竹二の劇評、岩波文庫『観劇偶評』参照）。写真には、その菊五郎による多助の扮装と雰囲気がよく表れている。一方で、二役の悪人道連小平も期待通りに名演した。『塩原多助一代記』の上演のあと、菊五郎は『怪異談牡丹燈籠』ほか円朝原作の芝居に四度主演した。

【参考】石版版画「東京名所 歌舞伎座」明治23年（1890）7月

縦 17.7 糎×横 23.6 糎。「明治二十三年一月十六日印刷」「明治二十三年七月廿四日出版」とある。また、「画伯無印刷 発行人 日本橋区馬喰町三丁目四番地渡辺忠久」とある。明治19年（1886）に起こった演劇改良運動の流れの中で、新たな大劇場を建て

ようとする福地桜痴（^{ふくちおうち} 解題2参照）の尽力により、明治22年11月に歌舞伎座が開場した。参考に掲げた石版版画は、そのころの歌舞伎座の様子。

当時の東京には六座の官許劇場が存在していたが、歌舞伎座は最高級の劇場となった。

座主（福地桜痴・千葉勝五郎）の好みで、外部の装飾は洋風にし、内部は檜を用いた日本風の三階建てだったという（『劇場図会（世事画報）』明治31年12月）。洋風の外観がこの石版画面からみてとれ、興味深い。展示24『怪談牡丹燈籠』や25『塩原多助一代記』はここで上演された。のち三回改築されて現在の歌舞伎座となったが、まもなく建て替えられることで話題を呼んでいる。

【参考】錦絵「新富座ひみき見物穴さがし」明治16年（1883）

大判錦絵三枚続。落款 守川周重筆／画工 浜町老丁目三番地 守川音治郎／出板人新富町六丁目二番地 神山清七／御届 明治十六年 月 日。

明治期の劇場は現在のように椅子席ではなく、江戸時代同様区切られた区画に数人が一緒に座るのであり、枱席や棧敷席があった。明治22年開場の歌舞伎座も椅子席ではない。当時の劇場の内部を知る参考として新富座の内部と観客の様子を描いたこの錦絵を掲げた。新富座は明治十年代、歌舞伎座が出現する前まで最高級の劇場として君臨していた劇場。

中央の一枚は、舞台面に仕掛けがあり、幕をめくると、三種の舞台面の絵が現れるようになっている。登場人物は、一枚目が「秋しく・瀬川采女」、二枚目が「紫紐大五郎・金かんばん・木崎久三」、最後が「ひげの意久・助六・あげ巻・あさがほ・白酒売」。

ここから、明治十六年四月の新富座の興行の演目、すなわち『石魂録春高麗菊』（一枚目の絵）、『金看板侠客本店』（二枚目の絵）と考えられる。新富座のもう一つの演目

は舞踊劇『茨木』で、錦絵の仕掛けの最後の画面は『助六由縁江戸桜』であろうから、異なっている。新富座の興行が始まる前に、錦絵を先に出版したものだろうか。『石魂録春高麗菊』は曲亭馬琴の読本『松浦佐用媛石魂録』を脚色したもので、錦絵に描かれた場面は「秋布」が戦場に赴く夫「瀬川采女」を見送る場面。夫が異国に出征するのを悲しみ、山に登って領布を振った松浦佐用比売の伝説（『万葉集』）がおおもとにある。

『金看板侠客本店』は侠客金看板甚五郎、同じく木崎久蔵、甚五郎に対立する侠客紫紐大五郎を描いたもので、錦絵の場面は三人が登場している。『助六由縁江戸桜』は男

伊達の花川戸の助六（実は曾我五郎）が主人公で、吉原遊廓へ恋人揚巻に会いに来て、対立する髭の意休や子分のかんべら門兵衛・朝顔仙平らとの喧嘩や、兄の白酒売り新兵衛（実は曾我十郎）への喧嘩指南などを繰り広げる。

観客に目を移すと、実にさまざまな様子が滑稽な視点をもって描かれている。熱中する観客、退屈している観客、寝ている観客、などなど、当時のひとびとが劇場でどんな風に過ごしていたか窺えて興味深い。現代にも通じる、明治の観客たちの様子を楽しんでもらいたい。

参考文献：

『円朝全集』（春陽堂〔1926～28〕、世界文庫による復刻版、1963・64年）

『三遊亭円朝全集』（角川書店、1975・76年）

（以下 50 音順）

磯部敦「明治十年代の新興出版社—東京稗史出版社について—」（『日本出版史料』5、2000年3月）

岡本綺堂「寄席と芝居と」（旺文社文庫『綺堂芝居ばなし』所収、1979年）

清水康行「鶴見大学図書館蔵『^榎牡丹燈籠』別製本について—その書誌的紹介ならびに初版本との語法上の相違点—」（『鶴見大学紀要 国語・国文学編』20、1983年3月）

清水康行「言語資料として見た速記本『^榎牡丹燈籠』の二重性」（『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』1983年）

永井啓夫『新版 三遊亭円朝』（青蛙房、1998）

延広真治「6 円朝・その芸と文学」（『近代文学』I、有斐閣、1978年）

延広真治「「英国孝子之伝」と“Hard Cash”」（『文学』1979年2月）

延広真治「三遊亭円朝「真景累ヶ淵」」（『国文学解釈と教材の研究』1992年8月）

延広真治「円朝没後百年に寄せて」（『文学 増刊 円朝の世界』2000年9月）

延広真治『落語怪談咄集』（新日本古典文学大系明治編、岩波書店、2006年）

山本正秀「『怪談牡丹燈籠』の初期刊本と逍遙の序文」（『国語と国文学』1979年4月）